

## 「南海トラフ巨大地震」の被害想定に関する住民の意識と反応 -デジタル放送研究会下田市・黒潮町調査から-

東洋大学 中村 功、アジア航測(株) 天野 篤  
デジタル放送研究会代表 藤吉洋一郎、(株)TOSYS 東方幸雄  
三重県 水上知之、日本大学 中森広道、TBS 天野教義  
セコム(株)IS研究所 三島和子、NHK 山崎智彦  
大妻女子大学 干川剛史、日本テレビ 谷原和憲

### はじめに

内閣府では、駿河湾から日向灘にかけての地域で、発生する確率は低いものの、地震対策をするときに想定しておくべき最大クラスの地震、いわゆる「南海トラフ巨大地震」について検討しており、2012年8月に被害想定を出している。それによれば、津波の高さは、高知県の黒潮町と土佐清水市で34メートル、静岡県下田市では33メートルに達し、死者は静岡県で約10万9000人、和歌山県で約8万人、高知県では4万9000人に達するおそれがあるという。日本災害情報学会デジタル放送研究会(第5次:研究代表藤吉洋一郎)では、この「南海トラフ巨大地震」について、被害が予想される地区の住民はどう感じ、何を求めているのかを探るためにアンケート調査を行った。

調査は2013年2月に、最も大きな被害が想定されている下田市と黒潮町で行った。対象地域は下田市中心部の浸水想定地域と黒潮町佐賀地区の浸水想定地区である(浸水想定地域はいずれも南海トラフ巨大地震について県が想定したもの)。調査人数は各地区60人の計120人で、性・年齢が住民人口にあうようにエリアサンプリングを行った。

### 1. 絶望感

想定を聞いて「あまりに大きな被害の想定なので何をしても無駄だと思うようになった」という人は確かにいた。しかしその割合は全体の10.8%(下田6.7%,黒潮15.0%)と少数だった。

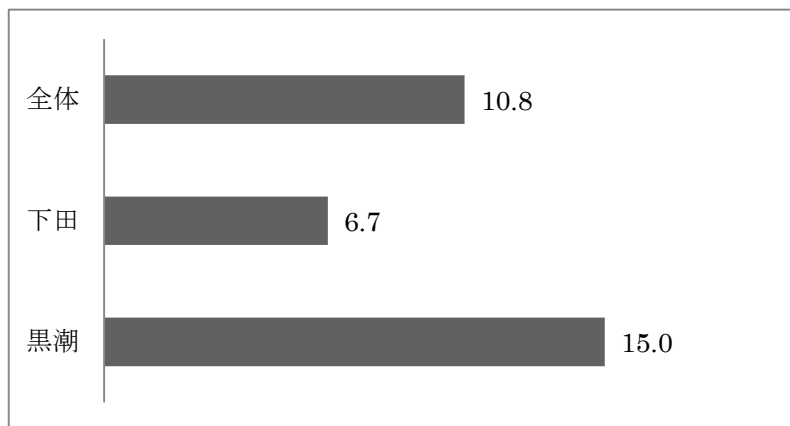


図1 あまりに大きな被害の想定なので、何をしても無駄だという気持ちになった

## 2. 「避難放棄」は少ない

その一方、津波を警戒して避難しようとする意欲は高く、防災マップを見たり、南海トラフ地震の想定を見たりすることで、さらに高まっていた(図 2)。すなわち本調査では、実際の防災マップを見せたり、南海トラフ巨大地震の浸水想定を見せながら、避難の意図を繰り返し聞いてみた。両地域では、それらの図を見せる前(普段)から避難の意欲は高かったが、調査で様々な図を見せるにつれそれが若干上がっていった(図 2)。

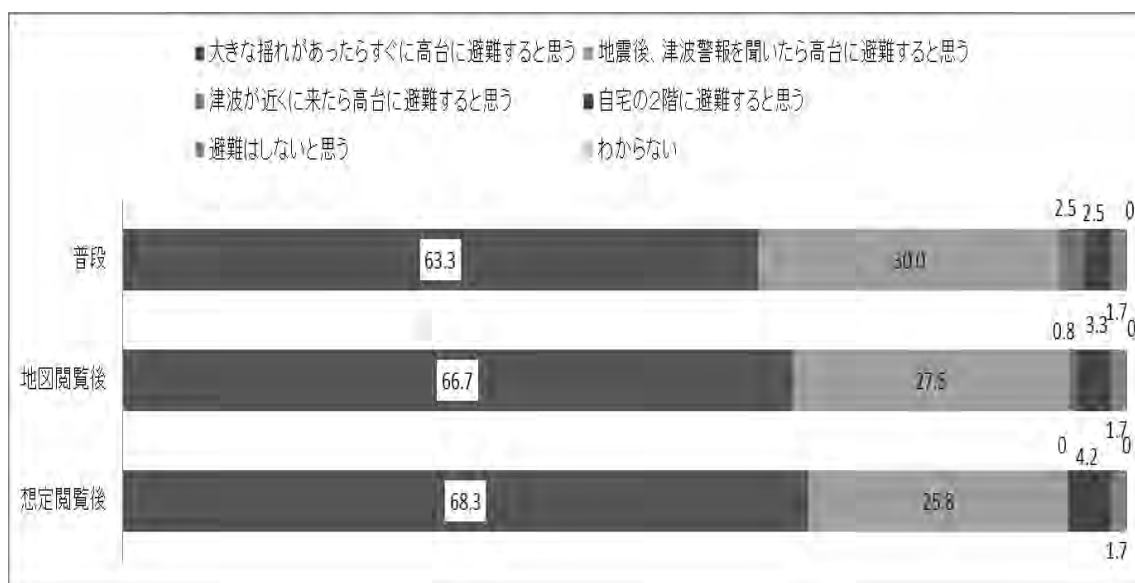


図 2 大地震が来たら避難するか

他方、巨大地震の想定を知って、どう思うかを尋ねたところ、もともと避難するつもりだったが、その気持ちが強まったという人がほとんどで(8割前後)で、逆に避難する気持ちが弱まった人はほとんどいなかった(0.8%)(図 3)。考えてみれば、自分が海沿いの避難地域に住んでいて、巨大な津波が想定されると聞いたとして、それなら死んでも仕方がない、と思うだろうか。

## 3. ショックと希望

南海トラフの予想を聞いた時には、絶望感を感じたが「詳しく知ると逃げられそうな気がしてきた」とポジティブになってきた住民が4割(下田3割、黒潮5割)に達していた(表 1)。両地域の差には黒潮町では下田より「34m」のインパクトが強かったことが考えられる。それゆえ黒潮町ではポジティブ化した人が多いと同時に「何をしても無駄だと思ふようになった」という人も下田の2倍いた。報道などを通じて予想を知った住民はショックだが、そこから立ち直り防災を促進する動きもみられる。

本研究は(公財)放送文化基金の研究助成を受けて実施した。放送文化基金ならびに調査実施にご協力いただいた下田市、黒潮町などの各位に深く謝意を表します。

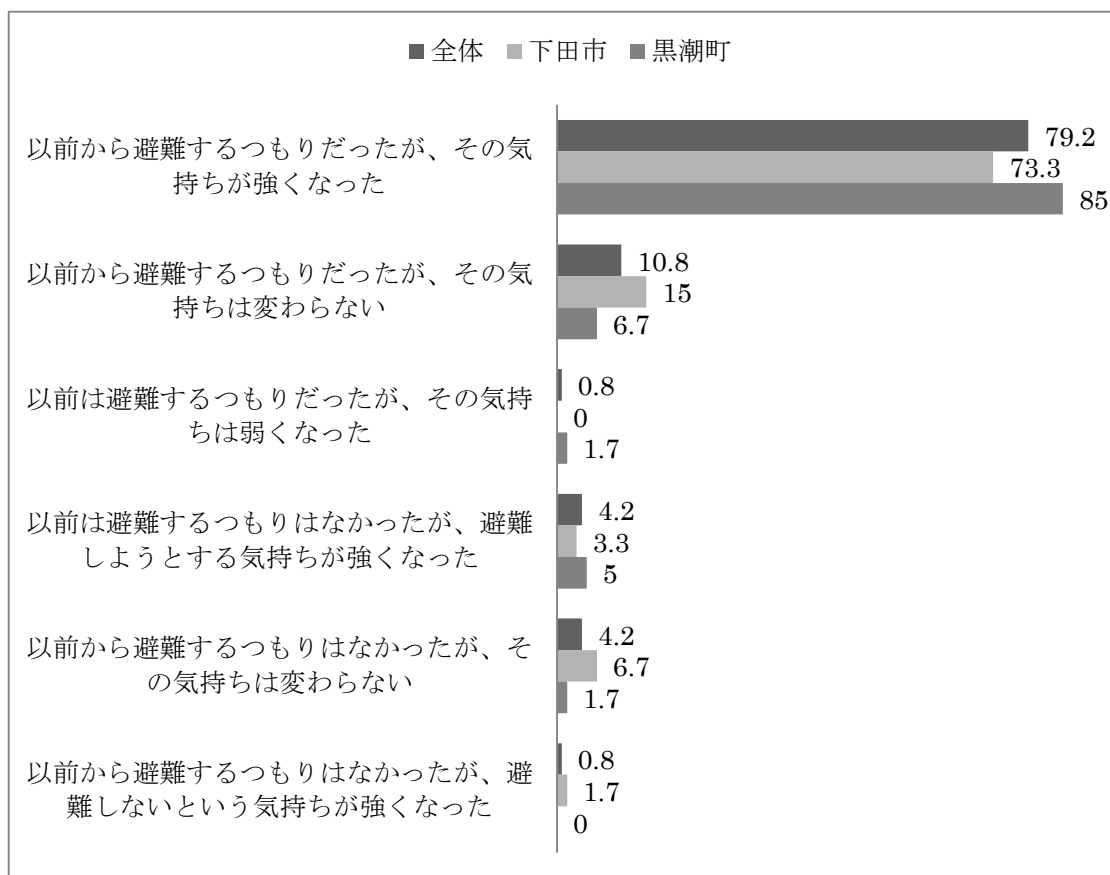


図3 南海トラフ巨大地震の想定を聞いて避難する気持ちは強まったか

表1 想定を知ってどう思ったか

	全体	下田市	黒潮町
今まで予想していたより、大きな津波が来ると思うようになった	80.8	73.3	88.3
今まで予想していたより、地震後すぐに津波が来ると思うようになった	65.8	63.3	68.3
あまりに大きな被害の想定なので、何をしても無駄だという気持ちになった	10.8	6.7	15.0
巨大な地震が近いうちに來ると思った	29.2	15.0	43.3
このような巨大な地震は自分が生きているうちには來ないだろうと思った	9.2	6.7	11.7
起こりうる津波の規模と頻度(レベル分け)に応じて、避難によって命だけは守る、防潮堤などの対策を実施して財産をも守る、というように現実的な対応を実施すべきだと思った	42.5	55.0	30.0
巨大地震が起きるとしても遠い将来の可能性が高いため、長い時間をかけて、計画的に備えればよいと思った	9.2	1.7	16.7
自宅を高台に移転させようと思った	10.0	8.3	11.7
高台への避難路を整備してほしい	63.3	50.0	76.7
逃げる場所が近くにないので、津波避難ビルや避難タワーを作ってほしい	33.3	45.0	21.7
津波避難ビルや津波避難タワーは意味がないと思った	9.2	8.3	10.0
33メートル・34メートルの津波と聞いた時には絶望的に感じたが、詳しく知ると逃げられそうな気がしてきた	40.0	30.0	50.0
車を使わないと逃げられないので、渋滞しない避難路や高台の駐車スペースを作ってほしい	11.7	6.7	16.7

#### 4. 東日本大震災の危機感の文脈

東日本大震災の後防災意識が高まり、今回の想定もその延長上で示されたため、危機感および防災意識がさらに強まったと解釈される(表 2)。

これまでの調査では、東日本大震災時、揺れの少ない(あるいはない)沿岸の避難率は総じて低かったとされるが、黒潮町では4割の住民が避難していた(図 4)。

表 2 東日本大震災で変わったこと

	地震や津波に対して危機感が高まった	自宅周辺の危険性について確認した	津波の避難場所について確認した	家族の連絡方法を確認した	非常用の食料や電池を買った	家具の固定をした	耐震診断・耐震補強をした	その他	特にない
全体	85.0	63.3	77.5	48.3	53.3	37.5	12.5	2.5	4.2
下田市	88.3	71.7	78.3	56.7	68.3	43.3	18.3	3.3	1.7
黒潮町	81.7	55	76.7	40	38.3	31.7	6.7	1.7	6.7

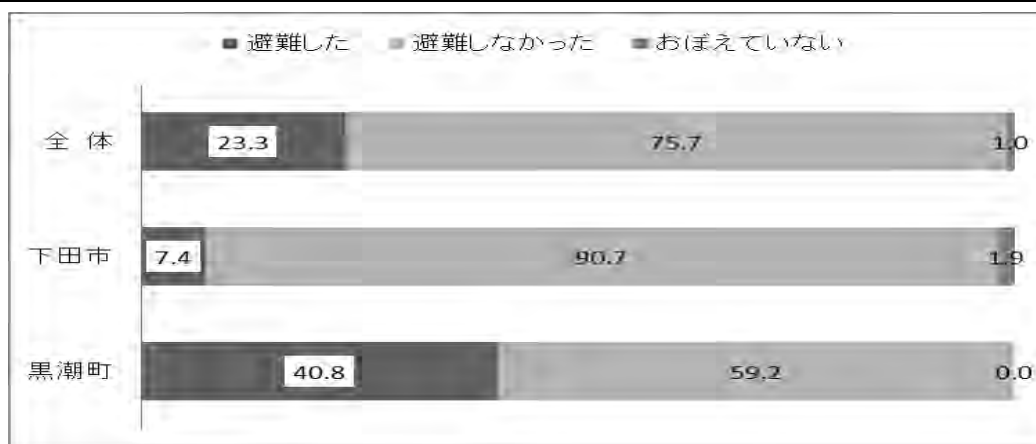


図 4 東日本大震災時に津波避難したか

#### 5. 不安を背景に避難設備の充実を要望

自由記述をみると、南海トラフ地震津波想定結果は概ね素直に受け入れているようだった。「国・県に望むこと」では、一刻も早く安全な避難路・避難場所を整備してほしいという声が多く、海拔表示をはじめ詳細なリスク情報の提供、防災訓練の充実、要援護者の避難対策、医療や備蓄など非常時に対する備え、役場や学校や住居の高台移転などの切実な訴えが多かった。

そのほかに「『津波が来たらしょうがない』というような周囲の言葉に、最近はもう死を覚悟するようになってきました」「何とか一人でも命を救える対策をとって欲しいです」「小さい子供がいることと、出産をひかえているので、地震に対してとても不安を感じます」という女性ならではの声が見られた。一方で「必要以上に騒ぎ過ぎ」「観光などに悪影響が出ている」「半ばあきらめている」「高齢者の増加、ガケ地の崩壊の危険性、夜の避難が難しい」など、気になる記載もあった。